



写真・塚本繁松氏・41歳・昭和14年

塚本繁松氏が逝かれ二十四年になる。早いものだ。私が塚本氏に接した期間はほんのわずかに、その氏について語る資格はない。しかし塚本氏のことは折にふれ思い出される。忘れ難い人である。塚本氏のことは山岳第四十四年第二号に田辺主計・鈴木弘両氏の追悼記と略年譜が載せられているので、それと重複するような記述は避けた方が、山岳の略歴はあまり簡単なもので、その後私が知り得たことを若干補足したり、また今年五月、富山県を旅行したとき塚本氏の故郷を訪れて、墓参する機会が得られたので、それらのこと

塚本繁松氏のこと

を併わせ記して故人をしのぶよすがとしたい。

塚本氏の年譜について判明していることはつぎの通りである。

一、明治三十二年（一八九九年）三月九日、富山県下新川郡大塚庄（おえのしょう）村四九二番地に生れる（現在朝日町大塚庄、北陸本線泊駅から南方四キロにある）。父作次郎、母りて、二人兄弟の長男である。家は半農半商であった。

二、明治四十四年三月二十五日、大
家床尋常小学校卒業（六年）、（尋常科
卒業と同時に高等科へ進学したはずだ
が、いま明らかでない）

三、小学校卒業後、泊町（現在朝日町役場の所在地）の資産家（当時郵便局長であり、金融業を兼ねていた）松田重左右衛門氏のもとで働く。

四、その後上京し、牛込区原町（現



昭和46年(1971年)

11月号 (No. 317)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

塚本繁松氏のこと……山本朋三郎……	1
南アルプス山名考……	2
美ヶ原と自然保護……	3
朝日連峰のブナ林……	3
ソ連アルビニズム年鑑……	4
1971年のヒマラヤ（日本隊）……	7
西壁隊歓迎会……	7
マナス山のハーケン……	8
カナダ山岳会の山小屋……	8
ヨーロッパめぐり……	9
海外通信	
パラピット……	6
同二信……	6
グリンデルワルト……	6
チュムルハン峠越え……	6
H・A・カーターより……	6
会務報告	
10月理事評議員会……	9
図書室便り	
図書受入報告……	9
定期刊行物資受入報告……	10
図書委員会報告……	10
その他	
山梨支部新役員……	10
北海道支部新役員……	10
コロラド大へ研究……	10
ルーム日誌……	10
年次晩餐会お知らせ……	2
山岳65年発行……	3

往復し、北アルプスを機上から眺め、写真撮影をしている。

九、東京へは昭和十四年十月十一日に転籍。そのときの住所は小石川区高田老松町十四番地となっている。

十、昭和六年、日本山岳会入会（会員番号二三一一号）、同十四年理事、主事を兼ね、昭和二十二年六月病没まで会務に尽した。

会報編集担当者として、一九四一年（十五年六月十五日）第九四号から一九四七年（二十一年九月二十日）第二三六号まで担当した。

十一、昭和二十二年（一九四七年）六月二十四日、腸チフスのため病没、行年四十九歳、法名「釈光顔」。山岳の年譜では六月二十五日となっているが、二十四日が正しい。これは寺の過去帳その他のによる。

以上が私の知る塚本氏の年譜のあらましであるが、なほ少し家族のことやお墓のことなどを書いておきたい。

塚本氏の父作次郎氏は昭和八年没、継母にてさんは昭和三十一年没、弟松次郎氏は昭和二十年五月十日、三八八歳で戦死、養嗣子の裕吉氏は塚本氏の死去に先立つこと三月前、二十二年三

月二十一日に三十二歳で病没している。現在大家庄の塚本家には紫松氏の弟松次郎氏の未亡人がさんとご子息が住まわれ、同じ部落であるが、やが離れたところに本家に当る塚本久安氏（紫松氏の叔父、七十一歳）が住んでいる。

塚本家の墓は本家の久安氏の宅地の傍にある。高さは約二m近くもあろうが、南無阿弥陀仏と刻まれた墓石が一基、道路わきに西を向いて立っている。「抱き若荷」の家紋が刻まれている。背面に昭和三年七月三十日塚本助九郎と刻まれているのは墓石の改修された年で、助九郎というのは本家の戸主である。

墓のぐるりは杉木立と竹ヤブで見晴らしはないが、すこし出ると景觀が開けて、背後に塚本氏が生涯のうちもっとも熱愛した朝日連峰をはじめ白馬以北の山々が美しくそびえ、前方には日本海が、そしてその向うに能登半島が長く横たわっているのが見わたせる。いかにも往時の塚本少年が、次第に山に心をひかれていった精神的過程が想像できるような風景である。なお菩提寺は真宗大谷派西心寺で、同じ部落の中にある。

☆

ここで私事に及んで恐縮であるが余談をすこし書かせていただきたい。私が塚本氏と終戦前にお会いしたのは昭和二十年の初めごろかと覚えていた。敗戦の色濃く絶望的な暗い毎日であったが、ある日ルームを訪れると塚本氏はただひとりで、足にゲートルを巻き地下足袋をはいて執務して居られた。会を訪れる人もいないようで部屋はひびそりとしていた。「もうしばらくお会いできませんから、」とってお別れをしたが、これが私の虎の門ルームを訪れた最後となった。

二十年八月終戦、それから毎日焦

土の東京を、右往左往する日がつづいた。山岳会のことほとんど忘れかけていたころ、回り回って会報一三五号が届いた。中に小集会の開催通知がある。昭和二十一年七月十四日、日曜日午後一時、場所は新橋蔵前工業会館講演「ウェストン著、日本アルプス登山と探検出版五十年を記念して」(浦松佐美太郎・松方三郎)とある。ほっとしたような、なつかしいような久々の思いで私は出席した。

南アルプス山名考

山本朋三郎

光岳

三峯山、三國嶽、三保山、三界山、三隅嶽、というように三の字のつく山名が案外と多いの気がつく。多の場合、山頂または、山頂付近で三つの国(部)に分かれているので、三の字が用いられてる。

光岳も安倍、榛原、下伊那の三部にはさまれそれぞれ分水嶺をなしている。井川村誌(郡誌)には光岳のことを『三隅嶽(九三九九尺) 安倍榛原下伊那三郡ノ間ニ在リ……』と書いてある。山の名前はそれの姿やその位置から名付けられることが多い。光岳は位置から三隅嶽と呼ばれたことになる。三隅嶽(みすみがたけ)がいつの間にか『光(てかり)岳』と呼ばれるようになったのかは正確には判らない。明治四十三年日本山岳会の『山岳』第五年第一号に、高頭仁兵衛氏外七名で赤石岳よりの縦走記には、光岳のことを三隅嶽と書いてある。このように考えると光岳といわれるようになったのは大正時代以後と思われる。

たは空襲で死んだとばかり思っていたが無事でしたか、よかった、よかった。」と言ってひどく喜ばれたことを思い出す。塚本氏とはこれが最後となつてしまった。その後、二回手紙の往復があったように記憶するが、越えて昭和二十二年九月十日発行の会報第一四〇号で塚本主事急逝の報を知っておどろいたような次第である。数え年四十九歳とは今思えばあまりに若い。どんなお葬式であったのかわからないが、後で聞くに郷里から当時まだ存命の母堂がひとり上京され、氏の遺骨

を持って帰郷されたということだ。そのころ山岳会はルームも定まらず塚本氏がリュックに会の書類を詰めて担いで回っていたという話は有名である。そのころ塚本氏にもうひとつの心労があったようだ。養嗣子裕吉氏の入院である。食べるものの満足にない当時、氏は療養中の裕吉氏のために郷里の新鮮な魚を手に入れるべく、東京富山間を何回も往復されたに聞いた。不自由きわまる汽車の旅は、おそらく故郷の美しい山々をのんびりながめるゆとりもないほどに苦しい旅の連続だ

つたろうと推測する。おわりに——私が塚本氏について知ることとは、凡そ以上でつきる。岳人としての塚本氏をくわしく述べることができないのを残念に思うが、塚本氏の生涯をたどってみて考えられることは、人間のものもろさ、弱さ、一番人間らしい一面がうかがわれることである。そして会員の一人として見たときつぎのようなことが言えると思う。塚本氏は人生の半ばにおいて、山岳会のために働くことに生き甲斐を見

出された。そして戦中戦後のもつとも困難な時期に遭遇し、不幸にして中道で倒れてしまったその一生も、山登りも、ついに未完成のまま終ってしまつたのではないかと。繰り返して言う、塚本氏逝いて十四年、所謂二十五回忌である。私は故人の霊に心から合掌したい気持ちでこの文を書いたが、拙文のゆえに氏の徳を傷けるようなことがなければよいと、そのみをおそれている。(四六・九・九)

んでいるがテカリとはヒカルという意味に關係した文字であり、またそのような意味をもたせた山の名前である。通説には、山頂に光る岩があり山の名がおきたといわれる。ヒカル岩があるので、テカリ岳と名付けられたとすれば、この岩は普通日本語の用法上からすれば、テカリ岩といわねばならないのだが、こんな日本語はない。そこでヒカルという言葉をも少し考えてみる。

ヒカルとはヒカルことでまたヒカル物をいう。ヒカルとは日赫(かが)ることを意味し、赫赫(かが)やくことをいう言葉である。このかがやくのやくは、春めく、うめく、めくと同じように発動する。音を出すといった意味がそれぞれ持たされて居る。少し理屈めく、赫赫(かが)がよとは照りきらめくことである。きらめくが光がキラキラする、光りかがやくなどの意味を持つてゐる。きらめく(煌)の自働詞が思い出される。物がきらめくさまをいう言葉。今は余り使われていないが、ひかひか、という文字あり、きらきらと同じ煌煌の漢字が用いられる。このひかひかより更に語を強めた意味を持つ言葉に『ひかひか』があり、同じく煌煌の文字を用いる。この、物が光り輝や

の意味で用いずに光ることの意味をもたせて『テカリ岳』といったものではあるまいか。そのテカリのツという縮まった音は発音しにくので、いつの間にか、人伝てに省略されてしままい『テカリ岳』となつたのであろう。テカリテカリという副詞がいつの間にかテカリリテカリと発音され、意味も縮まった状態を表わすのであつたのが、いつの間にか形態(禿頭)を意味し更にこれが名詞のように用いられてしまつたのではあるまいか。

飛躍的な考へかも知れないが更に、最初に『テカリ岳』と命名した人は、朝日に輝くやい岩なのか、夕陽に輝くやい岩を見たのか、更に見た地点はどこなのかを推測してみる。名の起りとなつた岩は光岳山頂近く西側。寸又川側の高度は二五八〇m位の所にある。この岩が見える地点は二方面しかない。一つは百俣沢の頭から光岳へへの縦走路を行き、間もなく光岳直下の三十種大の遺松地帯へ下ら下る尾根道。ここからほぼ真北に岩が眺められる。もう一つの地点は、寸又川の対岸、加加森山付近の稜線からである。他からは高度や地形で岩はかくれて見えない。地点が決れば光線は朝日なのか、夕陽に当って光るのか、どちらかである。

加加森山の稜線は水場が遠い。南アルプスの常識として水場の遠いところは露営はしない。この辺りから光岳の岩が輝くとしたら、朝日の逆光線が考えられる。しかしながらこの稜線で朝日を露営するには、加加森山の水の無い山腹で露営しなれば眺めることが不可能である。とすると、あとは、百俣沢の頭から光岳へ縦走する時間は、寸又川源流から登つて来て、ちょうど光岳が、夕陽に輝く頃となる。光岳の下、センジケ原の露营地もあと二十分位、という地点で、フット見上げる光岳の岩が夕陽に輝いており、茜色の夕陽に輝く岩を見て山名を考える心の余裕も出ようというものである。(四六・十・五)

『てかてか』よりも更に強い意味を持つ言葉として、『てかてか』がある。この名前の、『てかてか』と近づいて来た。この『てかてか』から、『てかり岳』の『てかり』は引出せないのである。元来、『てかてか』とは、副詞であつて名詞ではない。『てかてか』に磨かれた廊下がひかる」と用いるように、ひかひか、びかびか、と同じ意味を持った言葉である。さて、静岡県の古い方言で、禿頭(ハゲアタマ)のことを『テカリ』といつていた。明治四十三年発行の静岡方言辞典にのっている。今はほとんど死語になっていると思う。この方言を当てはめると、光岳は、ハゲ山の意味になる。現在山頂はかなり太目の雑木でおおわれている。山頂の岩の光ると、禿頭の光ることが関連して、ハゲ

の、どちらかである。加加森山の稜線は水場が遠い。南アルプスの常識として水場の遠いところは露営はしない。この辺りから光岳の岩が輝くとしたら、朝日の逆光線が考えられる。しかしながらこの稜線で朝日を露営するには、加加森山の水の無い山腹で露営しなれば眺めることが不可能である。とすると、あとは、百俣沢の頭から光岳へ縦走する時間は、寸又川源流から登つて来て、ちょうど光岳が、夕陽に輝く頃となる。光岳の下、センジケ原の露营地もあと二十分位、という地点で、フット見上げる光岳の岩が夕陽に輝いており、茜色の夕陽に輝く岩を見て山名を考える心の余裕も出ようというものである。(四六・十・五)

年次晩餐会のお知らせ 本年度年次晩餐会は十二月四日(土)午後五時から平河町マツヤサロンで行ないます。会費二千六百元。ロビーにバーを設け「この一本展」は故深田氏の作品を展示します。またルム委託図書などの販売もしますからお早めにお出で下さい。なお出席の通知を出し無断欠席された方からは会費を出いただきません。欠席は二日前に御連絡下さい。

美ヶ原と自然保護

川上 隆

九月中旬、久しぶりにクライミングとは違った山旅を楽しもうと、ぶらりと美ヶ原に出かけた。早朝の松本からのバスは若い人達で満席、華やいた雰囲気は包まれていた。終点の天狗ノ露路より歩いて二十分、テレビ塔の建つ王ヶ頭に着く。おりからの露雨で、赤、黄、青と色彩豊かなウインドヤッケや、透明のビニールカッパを着た娘さん達が、三々五々と歩いている。山本小屋までの道のりは、巾十五mから二十mの牧道、時々ジブも往来し原の景観を著しくそこねている。塩くればより茶臼山に向かう。起伏のゆるやかな等高性高原台地は、ひとすじの散歩道をつけ、草原の緑は果しなく続くかのようである。雨のためか誰もいない。静かな高原の風情に心をなごませながら、とぼとぼと彷徨する。

茶臼山のロッジにて休憩、松本から来たというハイカーが話しかけてくる。「長野県企業局は、霧ヶ峰に既設した悪名高いビーナスラインを、和田峠から茶臼山東山腹の天然林帯を経て頂上台地上を王ヶ頭と、山本小屋まで延長する計画を強力に推進している。霧ヶ峰に続いて美ヶ原も終了です」ということであった。

自然保護一―号によれば、山梨県では富士山麓河口湖から、秩父山系を尾根通しに八ヶ岳山麓麓の森まで、大スカイライン建設の計画をもっているとか、このような観光開発計画は他の山岳にもみられる傾向である。本来、公共団体こそは自然資源を守り、自然を保護するという本質的観光開発に力を入れるべきはずであるが、最近ではひたすら日本を砂漠化する、自然破壊計画を強引に進めているとしたか思

えない。少々憂うつな気持ちになり、陣ヶ坂より三城牧場へ下った。

美ヶ原建設について、私なりの考えて纏めてみると、美ヶ原の価値は草原、亜高山植物群、山腹の樹林帯などの調和のとれた自然美と、草原の緑にひたひたの山岳展望にあると思う。頂上台地は、日本に唯一といわれる等高性溶岩台地で、起伏が少ないうえ、老幼男女すべての人々にとって非常に歩きやすい。高原の端々までの道のり約四kmから五km、往復三、四時間、誰でも無理なく自然の散策を楽しむ処は、他にないだろう。すでにバス路線は天狗ノ露地、山本小屋、白樺平まではいつており、あえてテール台地上に車道を建設する必然性はまったく考えられない。しかも車道建設により、茶臼山東山腹の天然林帯（混交樹林、モミ、コメツガ、ダケカンパなど、樹令九〇年から一八〇年）が約五kmにわたり破壊されることになる。

美ヶ原の自然保護について、あえて提案すれば、一、すでに運行されている松本から天狗ノ露地、三城牧場、屏峠、丸子から白樺平、和田から山本小屋などのバス路線の改修。二、各登山道の補修と改良。特に自然景観を著しく阻害している王ヶ頭から山本小屋にいたる牧道は、巾一mから二mの散歩道とする。三、王ヶ頭にあるテレビ関係諸施設は、必要最少限のもののみを残し、他は場所を移動することが望ましい。高原上の人目につく一帯は自然のままに保つことが大切である。四、自然公園の保護と、管理体制の強化。

六、美ヶ原線が東、中、南信各地方相互の経済交流を意味するならば、わざわざ頂上台地に建設するよりも迂回路線——例えば屏峠から三城牧場經由天狗ノ露地などを考えたらよいと思う。現在、霧ヶ峰や、美ヶ原のようなケースが、全国各地で問題となってい

る。そろそろ日本の自然保護のあり方について、関係各機関が真剣に考えなければならぬ、差し迫った時期に来ているようである。

先日ルームで島田巽さんからうかがったお話によれば、ご家族と晩秋新雪の美ヶ原を訪れた際、三六〇度の山岳展望に恵まれ、奥さんがこんな素晴らしい景色が日本にあったのかと驚嘆されたとか、私も次の機会には晴天をつかみ、新雪の美ヶ原の山岳展望を楽しみたいと思っている。

朝日連峰のブナ林

村井 米子

「車道」と「原始林」の大伐採とは亜高山帯以上の地点の自然破壊の二大問題だが、東北に奥深く秘められた朝日連峰をつむブナの森林が、かくもべろりと皆伐されていようとは……去る十月六日、七日、現地を訪れた私はただただ驚き入ってしまった。

今夏は、七月末から立山から剣沢、雲仙、尾瀬、白山、大山と五つの国立公園内の登山をしたが、雲仙をのぞく四カ所は、いずれも、車道と森林伐採の、いたましい爪跡をまざまざと見せつけられた。そして、この二つは不可分の関係で大自然を荒廃させている。山は自らの足で一步一步登ってこそ……という原則が、なぜかくも無視されるのか、……わが国民性を疑いたくもなる。

ところで、朝日連峰といえは、東北の山岳の中でも原始性に富み、現時点では飯豊山よりも深い自然を味える山岳……ともかく日本の高山深山の中で、も随一のブナの森林美と私は感じていた。その樹齢百年の原始林が、まことに無残にも太い白骨化した切り株になっってしまったのだ。（その切り株にはナメコ茸の菌種がつけられて、麓の村

人たちの新しい産物を生んでいるが）つい五年ばかり前の春雪にスキーで峠越えした眺望と、樹間を滑走した森林の深さは、想出にのみ残って、折から秋晴の青空に横たわる、大朝日岳から以東岳までの主脈の山なみは、一望の下に皆伐された裸身をさらして、私たちの胸を痛ましめた。

その大展望は、朝日連峰の東北側、寒河江川上流の大井沢部落から、地蔵峠を経てのぼった田ノ沢林道の、大頭森山（九八四m）の一角からで、実に雄大きまるものだが、その宏大な区域のブナ林をよくもこれほど皆伐したものと憤りを越えて呆れ返った。

僅かに八久和川の峡谷沿いのをのぞき前山の裏側や、主脈の裾の、奥地のブナ林を、十年計画で秋田営林局寒河江営林署は、なおも伐り進んでいる。かつて森林にまもられていた動物の楽園も、むざむざと失われている。主脈の大雪山とお花畑につづく森林が、電気ノコのひびきに泣き、緑を削がれているのである。

車を返して、根子川上流日暮沢小屋奥へ入った。ここは国立公園地域内だが、法律的に弱い第三種なので、目下伐り進んでゴロビツ沢に迫ろうとしている。大朝日、小朝日から、古寺山とつづくものと、竜門山から清太岩山を経るのと、二つの登山路の通るところだ。

しかも、ブナの老木大樹にまじる黒々と逞ましい針葉樹はヒメコマツで、植物学の泰斗本田正次博士は、これほどヒメコマツの多い美林も珍らしい。そのうえ、オオシラビシ（一名アオモリトドマツ）など無くて、ヒメコマツばかり揃っているのも特長で、學術的にもいかにも惜しいと嘆かれた。仙台には東北大学名誉教授木村有香博士は天然記念物にしたかどうかといわれた。そのヒメコマツの方が値が高いため、

伐って積んである大木はヒメコマツが主でちょっと年輪を数えても二百年以上である。

いったい国有林とは、私たち国民みんなの宝のはずだ。しかるに営林署の計画書を見ると、その宝のブナ林は十年足らずで失われそうだ。かつて亜高山帯の原始林を伐いて、植林の成功した例は殆んど聞かれない。ただ営林署の経費のために、貴重な国有林を伐採するとは、およそ道楽息子の所業ではないだろうか？

子孫にこのすばらしい原始景観を失うばかりでなく、動植物の生態系も破壊され、冬に白化するこの地特有の動物も絶えよう。また治山、治水の機能も鈍り、住民の生活環境を悪化するであろう。山麓一体から「国立公園朝日地区のブナの原生林を守る会、会長志田忠儀（国立公園管理人）」が反対の叫びをあげた。

日本山岳会の自然保護委員会も、開発過大の現時点に残された、原始性ゆたかな山地を守るべく、協力を惜しまぬ決議をした。

林野庁は営林商的経営方針を改め、環境庁は特別保護地区を拡大し、大蔵省は自然保護への国費を惜しまず、国民の声を聞いてほしい。

山岳第六十五年発行 たいへん遅れましたが山岳第六十五号が発行されました。主な内容は、進蔵日記（上）（成田安輝）グルジャ・ヒマラヤ登頂（栗原義美）モンゴル・ハルヒル連峰（東京外語大）冬季アイガー北壁直登（三羽藤）南極点に立つて（村山雅美）エベレスト第一次、第二次偵察藤田、宮下）その他追悼、図書紹介などです。本年度会費未納者はお送りしませんから至急会費をお送り下さい。本年度新入会員は千六百元（送料百四十円）でお頒けします。

ソ連アルピニズム年鑑

— (一九六五〜六七年度) —

(二)

田村俊介
(在モスクワ)

一九六五年、七月五日、A・ヴォドドホフを隊長とするカザフスタンのアルピニストが車でブルジュバリスからサルイジャス峡谷を経てイヌイリチエクに入り、マイダアディル広場に着いた。ここに全資材がヘリコプターで投下され、これらの資材を更に四日がかかりでジーキ氷河のイヌイリチエク氷河との合流点まで担ぎ上げた。二七日には同合流点より更に一日の行程のところにあるベース・キャンプ・ハレドヴィイティVで先発隊に後発隊が合流した。高度四四二〇m。ここから「高いコル」を経て北西稜を縦走、西峰を越えて主峰に達するのである。七月三十一日、クレバス、セラック、氷瀑を通り抜け、「高いコル」の直下のイヌイリチエク氷河上にキャンプを設けた。

翌日より攻撃が開始された。そしてこの日から十四日目の八月十四日西峰六八一六mに達し、この斜面に雪洞を掘りビバークした。隊長ヴォドドホフを含めた五人のアタック隊は翌日一五八七mのボエンスヌエ・トボグライの頂上に立った。

「ビヤンジ河にそびえる
モニニューメント群」

V・ネクラソフ

パミール南部に七〇〇〇mにわずかに及ぶ二つの山を持つシャフダリンスキー山脈があることがわかったのは、やっと一九三七年になり、地質学者、S・クルウニコフの調査の労作が発表されてからである。その一つはカルル・マルクス峰（六



ヴォエンヌィエ・トボグラフィ周辺図

六二六m)で巨大なピラミッド形のこの山は垂直に切れ落ちた北壁を持つている。一九四六年九月、E・アバラーコフとE・ベレッキという、ソ連岳界を代表する二人の最も優秀なアルピニストを隊長とする登山隊がこの城を攻め落した。他の一つはフリードリッヒ・エンゲルス峰（六五五〇m）いでこれは一九五四年九月、M・グババリアニを隊長とするグルジャ山岳会によって落された、しかしエンゲルス峰はそのあまりにも困難な故に、一九六三年までの一〇年間登頂されなかった。一九六三年の夏、陸軍探検山岳会がこの山に挑み、南壁のクロアールよりパリエーション・ルートを開いた。更に六四年の夏、V・アバラーコフを隊長とするスバルタール隊及び労働組合山岳会「トルウド」のレニングラード隊それにウクライナ隊が登頂、レニングラード隊は北面より、ウクライナ隊は東南稜よりそれぞれ登頂した。一九六七年には再びスバルタール隊が南西支稜の接合点より六三二八m峰を経て登頂、オデッサ隊はクラシツク・ルートより挑みそれぞれ登頂した。六八年には四隊が挑み三隊が頂上を踏んだ。難攻不落を誇っていたエネフもこのように矢つぎ早やのソ連の優秀なアルピニストの攻撃にたてつけに頂上を開け渡した。

「エヴゲーニヤ・コルジ
エネフスカヤ峰一九六六年」

K・クジミン
V・イワノフ
V・ツェトリン

一九六六年夏、レニングラード「スバルタール」隊は総指揮、V・キーゼリ隊長フダールノフのもとにヴォロシロフ峰から南東稜の南リッペを通りコルジエネフスカヤ峰（七一〇五m）への縦走を完行した。陸軍山岳会はV・ラツェクを隊長に一九三三年、三七年、五三年（初登頂）一九三三年にトレスされたクラシツク・ルートへの北稜から登頂した。A・オヴチニコフを隊長とする「プレベストニク」隊は南稜と南壁より登頂した。本文の大半は主として「プレベストニク」隊の登頂に費されており、登攀中二隊員が肺炎にかかり発病、この二人は陸軍山岳会の協力を得て救出された。

「バベーダ山群縦走」

B・ガヴリロフ

本文は高度、気象条件、地理的条件よりソ連邦で最も困難な山とされているバベーダ山の西峰から主峰さらに東峰への一四Kmにわたる縦走の記録である。

バベーダ山は西峰（六九一八m）主峰（七四三九m）東峰（七〇四九m）より成っており、東峰より主峰までは約四Km主峰より西峰まではその倍以上もあり、全長一四Kmある。

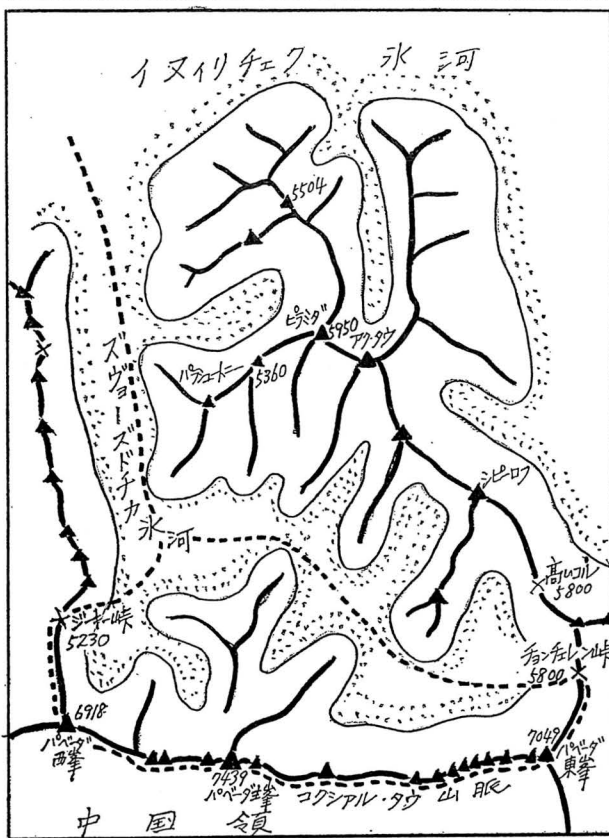
主峰への登頂ルートは北面からの直登ルート、チョンチェレン峠より東峰を経て主峰に至るルート、ジーキー峠より西峰を経て主峰に至るルートと三つのルートがある。

一九六六年の夏、はじめてグルジャ山岳会と労働組合「トルウド」山岳会が西から東への縦走を試みたが、悪天候のため、やっと西峰にたどりついただけで失敗に終わった。

一九六七年七月、チェレヤビンスクの山岳会はA・リャブウヒンを隊長にこの縦走を試みた。隊員は七月八日、フルンゼからブルジュバリスキーを経て、マイダアディル広場まで車で入った。ここからヘリコプターでイヌイリチエク氷河の舌端にある緑の広場チオレンタシまで運ばれた。荷物はジーキー氷河上に投げ落された。隊員は二日か



去年の七月十七日に槍ヶ岳山荘に隊が初登したゼラゴ峰（五九〇七m）。長崎大隊の一潮義典君等。パンダコとタウイカのコルより。左方遠景はティリチ・ミール。



パバード山群周辺図 1971・2・28

×
×

田村 隊の手記を見つけた。二四日、下降を開始し、間もなく二人のサポーター隊に出会い六二〇〇mで一緒にビバーク。サポーターの二人が食事を始め何から何まで気を使ってくれる。ただ食べて寝るのみである。二六日、二〇日間の縦走を終え、ベース・キャンプに着いた。

かりで、イヌイリチエフ氷河上を四〇〇m行き、一六日ジーキー氷河との合流点に到着した。一八日より偵察とルート工作に出かけた。隊員は三日がかりで氷塊とクレバスの中で奮闘し、五二〇〇mのゴルまでルートをつけ、五二〇〇mザイルをフィクスした。二五日、ジーキー峠へ荷上げ開始。二六日、ジーキー峠のゴルに出た。二七日は西峯の北稜にある第一岩壁の基部にまで登り、五七〇〇メートル地点にキャンプ設置。二八日、二九日、三〇日は吹きすさぶ嵐に動きがとれず、テントの中でありつけになった。

で降りて来た。八月五日、天気は完全に回復し、天気予報では五日から一八日までの好天を約束している。六日、八人より成る第一隊出発。七日、続いて六人より成る第二隊が出発した。九日、六五〇〇m地点にキャンプ設置。一〇日、六八〇〇mより成る第二隊はルート工作の上、バベード西峯を踏み、下降した。下降途中、八人より成る第一隊に会ったが、第一隊は引き続き登高し西峯直下で雪洞を掘りビバークした。一日、八人の第一隊は西峯を踏み更に稜線沿いに五〇〇m前進。一二日、隊長リャブウヒンは数日前に打ちつけた肩がひどく痛みはじめ、下降を余儀なくされた。医者のルンダ、それにV・ナジニンP・グレイリフの三名が隊長に付き添い下降することになった。四人に減った隊員は、同日三Km前進し、主峯の手

前の高度六九〇〇mの広々としたゴルにまでたどりついた。一三日、更に前進し、七二五〇mの高度でデントを張る。

一四日、一行はついに主峯七四三九mに達した。頂上周辺は平坦な長い稜線が続く、頂上がどこであるかわからぬ程である。一四日、一五日、一六日一七日と、吹雪で下降がまたげられた。一八日、下降を開始、六八五〇mまで下降。一九日、ガス濃く視界利かず低滞をとり、サポーター隊はチョンチエレン峠に向っており、リャブウヒン隊はベース・キャンプにたどり着いたことを知る。二〇日、二Km前進し七〇五〇mまで再び登高する。ここからまた六七〇〇mまで下降しビバーク。二一日、七〇四九mの東峰に達し、一九五八年のエロヒンを隊長とする初登頂

「科学アカデミー山脈の六〇〇〇m峰攻撃」

V・エリチベコフ
A・ビヤンコフ
G・クルコフスキー

本文はイズベスチャヤ峰(六八四〇m)とコムアカデミヤ峰(六四三九m)のウズベキスタンのアルピニストの初登頂記録である、前者は一九六四年、後者は一九六五年初登頂された。

イズベスチャヤ峰はビョートル一世山脈との交差地点よりやっ北東よりの科学アカデミー山脈の軸部にそそり立っている。

コムアカデミヤ峰はガルモ峰地域で科学アカデミー山脈に接合しているフエドチニコ山脈の南西部に位置している。(続く)



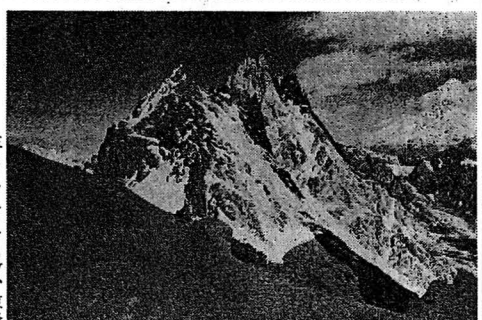
この右の写真二枚は、本年七月ヨカサのチャティン・タウ北壁を目指して行った、RCCII隊に参加した西諒君が撮ったもの。悪天候に恵まれ目標の壁は完全出来なかったが、写

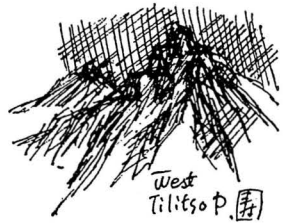
真の山を登攀して、いささかウツパンをはらしたようである。ソ連の山だったのでここに掲載させて頂いた。

▼会報原稿ご寄稿下さい▲

シヘリダ峰
シユロフスキー峰

左よりシヘリダSW、東峰セントラウル。右がエルブルース。ウシバブラトよりジャーマンビバークより





海外通信

ハラントヒット

色々お世話になりました。涼しいシベリアから一日で中央アジアへ飛びました。暑さは可なり厳しくちよいとばかりこれにやられました。

しかし中近東の一角に足を踏み入れてその魅力を垣間見た想いです。中近東は東西の接点ゆえ、人を惹きつける魔力がありますね。

昨日、パミールの一端と思われる雪の山を機中から望見しました。暑さ厳しき折柄、お元気で。

ダシニケントにて 山内敦人

(吉沢宛)

同 二 信

我々一同何とか保たせております。聞きにまざるインドの暑さにうたっています。

七月二十一日カイパル峠をこえてパキスタンに入りました。一週間ばかりで二〇〇Kmぐらゐ移動したことになりました。手続きを終り明二十六日入山のため出発します。

諸般の事情を考え合せ、チトラルからまわります。富山のブニ隊とカーブルで、石川のティリチ隊とビンディで会いました。ティリチは仲々厳しかったようです。しかしよくやったと思います。われわれの方も精一杯やっています。

地形的に複雑なところなので登路の発見が鍵でしょう。ここまでやってきた道中のように笑顔を絶やさず、精神的なゆとりをもたせて事に当ります。勝敗はまさに時の運。

ベジャワールにて 山内敦人

(吉沢宛)

グリンデルワルト

七月中旬ヨーロッパに突然出かけて来て、シャモニ、グリンデルワルトと来ました。登山観光客でありますので

専ら山の見物で、近藤等、大倉大八氏のガイドで山を歩いております。シャモニのミディやモンブラン。当地ではメンヒ、アイガーのミッテルレギーなどぞろぞろ歩きました。あとツェルマットでマ峰に登ったラセ・フィニ。

(吉沢宛)

安川茂雄

◆チュムルハン峠越え◆

拝啓 日本も暑い夏がはじまっていると存じます。いかが、お過ごしでしょうか。ここラルビンディもモンスーンに入っており毎日(多分毎日)だと思ひます。今日ギルギットから二〇日ぶりにビンディに戻りましたので書いております。

さて過日お手紙を差し上げたように六月下旬はビンディでブラブラしておりましたが、その間にチトラルのシャザン・ブルハンディン氏に会い、また旅行事務所でもチトラルからギルギットへ抜ける陸路の許可を得ましたので七月五日にビンディを離れベジャワールから空路チトラルに入りました。そこで例のごとくシャザン邸にやつかいになってから、八日にチトラルを出発し、ブニまでジープで一日かかって入りました。

九日にブニよりマッスジに着き、ここで同行の私の会、秀峰登高会の小侯

と分れて一人一日よりヤルフン河にそってプレップ、ミラグラムと歩きまわりましたが、連日の暑さと一人歩きのため体力的、精神的両方とも消耗してしまいました。更に上部へ行くのをあきらめました。最初は一人で最奥のチアンタール氷河あたりまで入って、その後ギルギットへ抜けようと思ひ出たのですが、あの暑い砂漠の中での一人旅は湿気の多い中でのんびりと育った日本人には少々無理のように思ひあきらめることにしました。

これまでの私の登山や旅行のうち、あまりわびしいと感じたことは一度もありませんでしたが、今回はわびしいと人恋しさにやられてしまいました。多人数だったらそんなことはないのと思いますが、そこは一人旅の弱い所だと思ひます。ミラグラムからそのまゝ、引き返すのもあまりにも芸がないと思ひましたので、そこへ注ぎ込んでいるミラグラム・ゴル氷河に入ってシャハン・ドックをながめ、また翌日は一つの南のグララガルに入って奥の山をながめて来ました。あまり高度は高くない、もう登られてしまった山なのだと思いますが、楽しそうな五〇〇m峰が、沢山あります。

そのあとカルギという部落より沢筋の道をたどってチュムルハン峠(土地の者はチャマルカン・パスあるいはジャマルカンといっていました)約四三〇〇mを越えてギルギット側のバルサットに下りました。峠への道は割合良く歩かれており、土地の者は(ヤルフン河の上流の者がギルギット側へ出る時に利用するそうです)良く使っているそうです。峠付近の景観は素晴らしい、これまでの疲れも一気に吹きとんでしまいました。またヒンズーラジ山脈を横断してチトラルからギルギットへ抜けると考えてみると余計スカッとなりました。

ただビンディで得た許可はマッスジから南に入ってからシャンドール・パスを越えるようになっていたのですが一日も早くギルギットに行きたいという気持ちに負けてしまい、別の峠を越えてしまいました。バルサットから一日歩いたという所よりジープに乗って七月二日の夕方八時にギルギットに着きました。ここでポリティカルエージェンシーでインドス河道の通行許可を得て二三日にギルギットをあとにしギザールで一泊、ナンガをながめながら朝を迎え、そのあとジープで二日ばかりでインドスにそって下り、二六日朝ビンディに戻りました。インドス河道は今拡張工事中で三日も車にゆられていたのでカメラがガタガタになってしまいました。

これで私の予定もほぼ終りであと八月七日にカーブルを發ってシベリア鉄道経由で八月二日に日本に戻る予定です。ビンディで少々暇がありますのでラホールのハヤット・カーン氏のところへも行ってみようと考えております。八月下旬か九月にまた東京でお会い出来ることを楽しみにしております。草々

(吉沢宛)

広島三朗



向井ビル 地下鉄竹橋駅か土竜の橋を歩いて外へ出ると気象庁があり、やがて錦町河岸の橋。前にJACの事務所のある向井ビルが現われる五階也。



◆H.A.カーターより◆
ディア・イチロー。葉書に宛名を書いたところで、直巳植村さんにおつかりました。われわれは一緒にスキーをやりましたがとても愉快でした。今年もコルディエラ・ブランカへ行つて楽しい山登りをやりましたが、悪天とナダレの心配で一山しか登れませんでした。それも前に登ったことのある山です。
イタリヤ二人とアメリカ人一人がナダレに遭って死んでしまいました。アン(注・カーターの妻君)からもよろしくとのこと。
アルゼンチンのパロチエにて(この葉書は植村君があらから帰ってきて渡してくれた。46年8月)

マナスルのハーケン

今西 寿雄

高橋照さんが、マナスル西壁からの登山に成功されたので、山岳会有志相よって祝杯をあげようというご案内をいただき、九月六日の会合に出席いたしました。

照さんには十八年まえのアンナブルナ登山のとき、たいへんお世話になっていろいろの交友なんです。アンナブルナるとき伊藤洋平君が十六ミリカラー

で撮影をしたのですが、このカメラやフィルム、またその編集や録音などいろいろのお世話になったのでした。その翌年だったと思います、全日本山岳連盟の総会、まだヒマラヤ登山が珍らしい時代でしたから私たちの十六ミリがアトラクションになって、照さんが映写しておられたのを記憶しております。その照さんの隊がマナスルの頂上付近で打ったアイスピトンで山岳会にちやうどいただいたました。頂上付近では天候が少し悪くて視界がきか

かったそうですが、このピトンを発見して頂上だということが分ったそう、ピトンがお役にたつてよかったと喜んでいますが。西壁の方は大そう悪いようでしたが、うまくルート作りをされて、何の事故もなく登頂され、ほんとうによかったと思います。

また、このピトンは十五年間八、〇〇mの風雪にさらされていましたが見たところさびもしないで、新品のような姿であったこともうれいことでした。

ど樹林帯を登ったところに建っている。そこはいわゆるメドウと呼ばれる

広い草原の一角で、周辺の山群全部が一望のもとに眺められる。四〇人ぐらい収容できる丸太造りのガッチリした建物である。

私たちが着いた日には十四名ばかりのグループが泊っていたが、翌日みんな引きあげてそれからは毎日四、五名ぐらいずつ入れ替り宿泊者があった。若い連中は、みな静かで薪割りや水汲み、掃除など自発的、協調的な

カナダ山岳会の山小屋

今井雄二

カナダ山岳会はロッキを中心にして山小屋を十六以上もっている。それが、どれもよく整備されて、会員の秩序ある利用に委ねられている。たつた一つの上高地山荘の再建にさ頭の痛い日本山岳会に比べて羨ましい限りである。

だが、これにはカナダと日本とは事情の違うことも考えなければならぬ。その一つは、日本の山では至るところ営業小屋がのさばっている、会の小屋はなくてすむという安易な考えがある。カナダでは、自然保護の立場から国の規制が厳しく、営業小屋はごく限られた少数しか許されていないために、山岳会自らの小屋をもつ必要があるのだから。

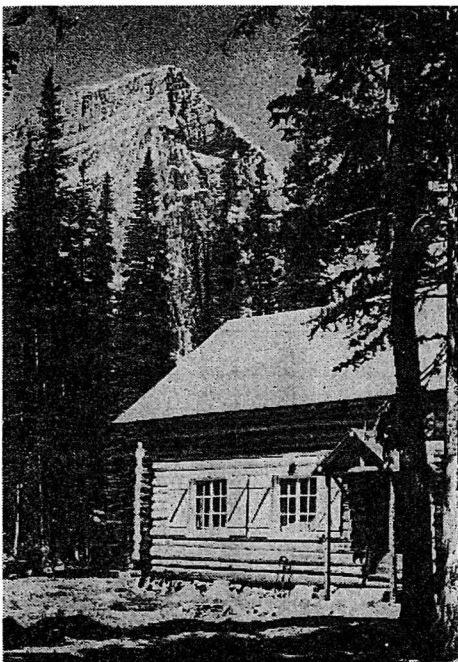
私はこの夏一カ月半にわたって再びカナディアンロッキの山旅をして来たが、その間に山小屋を二つ利用させてもらった。その一つはロッキ中部のレイク・オハラにあるエリザベス・バーカー・ハットで、もう一つは北部のトンキン・ヴァレーに近いフレイザー山群にあるウェイツ・ギブソン・ハ

ットである。どちらも管理人のいない無人小屋で、利用者は会の担当委員から鍵を借りていくことになっている。使用料は会員は一泊一ドル、会員外は二ドルである。このほかの山小屋もみな管理人なしでみごとに運営されている点は、日本山岳会でも今後検討してみ必要があるだろう。

最初に行ったレイク・オハラは、湖水を中心に十ばかりの高峰にとり囲まれた静寂環境で、ロッキの宝石と呼ばれる。その連峰を越えた向う側は、観光客で賑わう世界的な観光地レイク・ルイズだから、山群を隔てて対照的な様相を見せているわけである。

レイク・オハラ湖畔には、しゃれた営業ロッジが一日二回通じている。イズからバスが日に二回通じている。このバス以外は、十二キロほど手前から車の乗り入れが禁じられているからドライバーが殺倒するようなこともなく、公害と破壊から自然が守られているわけだ。

山岳会の山小屋は湖畔から一キロほ



のに好感がもてた。私たちが、この小屋に六月二十日前後、五日間滞在して七月になってから北上、下旬近くはトンキン・ヴァレーへ入った。ここはランバツという連峰を背に湖水があり十五キロにわたる草原が展開してハイカーのメッカになっている。私たちはジャスパーからバスで名峰エディス・キャベルへ行き、その茶店で一泊、翌日馬に乗ってトンキン・ヴァレーへ入った。一日がかりのトレイルの旅だった。そこでデントを張って一泊、翌日さらに九キロほど草原を横切り樹林帯を登ってフレイザー山群へ入った。サイモン・ピークを中心に、氷河に輝き立つ十幾つのピークがひしめきあっている山ふところ

に小屋があった。このウェイツ・ギブソン・ハットは眼前にアウトポスト・ピークが氷河を抱えて迫り、その下に、小さい湖がある。その湖水を前に、針葉樹林に囲まれて小屋が建っている。入ってみると広い室内はきちんと整頓されてゴミ・ウエイツ・ギブソン・ハット

つ落ちていない。隣りの炊事室には焚木が割って整然と積みあげてある。ひと目見ただけで、なんという行き届いた小屋だろうと思った。

炊事用のストーブの灰もすっかり片付けられ、ステンレスの流し台もきれいに拭き上げられ、鍋類やヤカンなども整然と配置されている。食器棚を開けてみると、あらゆる食器が揃っている。もう一つの戸棚には、雑穀、小麦粉、砂糖などから各種調味料、コーヒ、ココアなどまである。これは宿泊者が余った食料や用具などを小屋に残しておくという会の伝統が守られているからだろう。

ロビーのほうは二十坪ぐらいでカーテンのかかった大きな窓が三つあって明るい。大きな肘掛椅子が四つ小さい椅子が四十ぐらいいくちまられて、隅に食卓がある。立派なファイアブレスもあるが、これはバーデュー大学の職員たちの寄贈によるものだ。一九二〇年イオン峰で遭難死した学長ストン博士を記念しての寄贈である。私たちは毎晩この炉に大きな火を焚いて山小屋気分を満喫した。寝室は階上の屋根裏で、スポンジが敷きつめてある。

この小屋に備付けの署名簿をくつてみると、利用者は年間通じて十パーティ足らずしかない。私たちは四泊した、最後の日に四人づれの一族が登ってきただけだった。

この小屋は、この山群登攀のバイオニアだったウェイツとギブソンを記念して建てられたもので、二人ともかつて山岳会の会長を勤めた人たちである。どの山小屋もたいい人名がつけられているが、それはこうした功績者の記念だった、小屋を寄贈した人の名だった。いずれにしても、会として立派な山

小屋を多数もっているのは羨望の至りで、それが会の資金というよりも特志会員の寄付行為によって建てられたものが多いのを見ると、日本山岳会にこうした実例が、地方支部は別として上高地山荘以外にないのは淋しい。これまでに、鳥水小屋、木暮小屋、冠小屋、藤木小屋などというのがゆかりの山にあつたら……とも考えさせられるカナダ山岳会の本部になっているパンフのクラブハウスの立派なことは知っている方も多いであらう。本館のロビーには堂々たるファイアブレスが築かれていて、そこに燃える火は会員団らんの中にあって、これは氷河学者ヴォークス氏の家族が寄贈したものである。また食堂は一九〇七年本館が建てられた当時はテント張り期間に合わせていたのを、会員のスタンリー・ジョーンズ氏が妻の記念として本建築を寄贈したものである。本館を中心にして、まわりの林中には宿泊用の立派なキャンピングが十二棟建てられているが、これも始めはテントで間に合わせていたのを、個人やグループなどの寄贈で次から次へと本建築になっていったものである。

こうした会員の熱意によって支えられてきたこのクラブハウスも今年限りで取り壊されることになったのは残念である。一つには会員の熱意の減退から改修費に行きつまつたという理由もあるらしいが、私の会った会の先輩たちは、みんなそれを非常に残念がっていた。私の質問に対して、たつたと一言「ブーア・アドミニストレーション」と答えた人もあつたが、その運営を困難にした背景には、若い会員に往時のような積極的な熱意が見られなくなったことが最大の原因であらう。

海外からの山岳人の来訪も年々多くなってきたけれど、日本山岳会としては彼らを案内できる山小屋は一つもなかったといえる。今度上高地山荘が改築されることになって、それが実現すれば一応国際的な付き合いもできることになる。その実現のために関係者の献身的な努力は大変なものである。これは担当理事者や委員だけに委せられる問題ではない。全会員の資金面での協力が絶対必要であらう。海外進出に世界一のエネルギーを発揮している日本の山岳界も、海外から受入れ体制にもっと熱意をもつべきだと思う。今度カナダ山岳会の整備された立派な山小屋を見て、一層その感を深めた次第である。

ヨーロッパめぐり
安彦 六郎

この春三月下旬から五月上旬、スペインを振り出しにヨーロッパの山岳を回った。

マドリッドからサラゴサを経てバルセロナまでは国際列車にのりたのですが、いたるところ赤土の荒涼とした丘陵が続きました。ビレネーの山々を撮影しようと思つて、バルセロナで乗換えてローナで降りたのですが、目指すビレネーの山ははるかに遠く、ここからの撮影は失敗でした。ビレネーはやはりフランス側からの方が雪も多く、スキー場などもあり、山の形も整い立派であるようです。

ビレネーを諦めて、フランスのリオンに立ち寄り、そしてシャモニーにはいりました。ブレバンおよびエグニエ・デュ・ミディからのモンブラン、シャモニー針峰群は実に眺めのよいところ。ツェルマットでは、モンテローザ、リスカム、ブライトホルンなどを左手に見ながらのスキー滑降が実にすばらしい、またワインター・ロートホルンからのマッターホルンの眺めは一段と良く思いました。グリンデルワルトからのアイガー、ウエッターホルン、シユレックホルン、ミューレン、クライネシャイデックからのアイガーとメンヒ、ユングフラウなどもすばらしいものでした。(9・6)

会務報告

十月理事評議員会

(8日午後6時半本会ルーム)

出席者成瀬、吉沢副会長、中屋、山崎、丹部、板倉、神崎、野上、熊谷、村井、松永、神原、大森各理事、折井、加藤、金坂、島田、望月、佐藤、津田、織内各評議員

議事

自然保護の件 (板倉)

自然保護委員会が自然破壊のデータをそろえており、また遭難レリーフの自戒なども考慮している。自然保護に関する英文パンフレットを作り各国に送りたい。なお会として自然保護に関する懇談会を開くことにする。

年次晩餐会の件 (中屋)

十二月四日(土)午後五時からマツヤ・サロンと決定。この一本展は深田久弥氏の作品展を開くことにした。また司会を板倉理事にお願いする。

エベレストメダルの件 (中屋)

松本徹章で作製、日本山岳会の名義の使用料として一個五%を貰うことにした。この金は山荘建築費に当てる。また特別製品五十個の寄贈を受けたので、これは第一次以降の全エベレスト隊員に記念に贈ることにした。

上高地山岳研究所の件 (山崎)

①自転車振興会への交付金要望書、②環境庁への増設建築許可申請、③天然記念物地域への建築許可申請と現在三段階にわたって仕事を進めており、①は九月一杯の締め切り期間ぎりぎりに書類をとのえ提出し、これは村山評議員から文部省関係へも話しを通してら

らってあるので予定通りの金額は交付される見込みである。②と③については添付書類入手および書類作製要領を知るため、山崎理事と高山評議員が十月七日島々の安曇村役場、豊科の保健所、地方事務所、松本管林署へ出張した。環境庁への書類は全部ととのえしたので至急提出する(十月十一日提出)。

この書類は九月十五日、山崎、高山および設計者の山本孝治氏と三人上高地の国立公園管理事務所に出頭、太田技官から内諾を得てあり、提出後三カ月で正式許可がおりる予定である。③の手続は最も複雑で手を焼いているが、これも至急書類をとのえ申請する段階である。この許可は約六カ月かかる予定。研究所は明年五月には着工したい。

・台湾登山隊の件 (山崎)
十月九日から二週間三田会長以下会員有志が台湾山岳会の招待で台湾親善登山を行なうが、土産として二万円を本会で負担したい。この件了承。

・韓国山岳会来日の件 (神原)
明年三月来日を希望してきており要望により招待という形にしたい。ただし費用面は考慮しない。この件了承。

・推薦状発行の件 (山崎)
日大医学部山岳部バキスタン・ヒンズークシニ登山に本会の推薦状交付を申請してきている。申請通り発行することにしたい。この件了承。

▽報告
・山岳の件 (望月)
六十五年がようやく出来上った。遅れて申しわけない。(山崎)
・山日記の件 (山崎)
牧野内委員より十一月末までに出来ると連絡があった。明年度は内容、定価など再検討したい。

八月十五日二七五回現地小集会を数馬で、九月十五日川乗山で二七六回現地小集会を四コースに分け行ない、十月十五日はヒマラヤ遠征の実務についていうレクチャーを丹部理事にお願いしてある。十一月十五日はルームで山の歌の会、十二月十五日はルームで恒例の忘年会、一月十五、十六日は八尾根でスキー山行を計画している。

・日山協の近況 (丹部)
アマ・プロ問題でもめている。JACとしても何らかの手を打ってもらいたい。

・山岳復刻の件 (野上)
山岳創刊号を復刻することにし、会報にも予告を出した。現在七十名が申し込んできている。部数は三百部、頒価は千八百円(送料二百円)二、三号も復刻を予定している。

・図書交換会の件 (野上)
十月二十三日ルームで開催するが約百冊現在集まっている。なお手数料として従来五%であったのを十%とし、会へ五%、図書委員会へ五%と分け図書購入費に当てることにした。

・山岳診療所の件 (大森)

▽図書室便り (昭46・9)
図書受入報告
加納一郎氏寄贈
(1)小林克己著「熊・クマ・熊」昭和46
(2)地図協会より購入
(1)長谷川和泉編「地図関係文獻目録」明治・大正・昭和」昭和46
(1)日本図書館協会より購入
(1)査掛伊左吉編「図書の受入・保管・抽出シリーズ、図書館の仕事7」昭和44
(2)より・きよし編「NDCCのつかい方シリーズ・図書館の仕事9」昭和45

- (3) 岩淵泰郎編『和漢書目録のつくり方』シリーズ10 昭和44
(4) 丸山昭二郎編『洋書目録のつくり方』シリーズ11 昭和45
(5) 前川恒雄編『貸出しと閲覧』シリーズ13 昭和45
(6) 小田泰正編『レファレンス・ワーク』シリーズ14 昭和45
(7) 今まど子編『逐次刊行物』シリーズ17 昭和46
(8) 服部金太郎編『ファイリング・システム』シリーズ18 昭和44
(9) 関品編『視聴覚ライブラリー』シリーズ21 昭和45
(10) 神野清秀・竹内哲編『図書館の家具と用品』シリーズ23 昭和45
(11) 日本図書館協会編『図書館ハンドブック増訂版』昭和45
(12) 日本図書館協会編『日本目録規則65年版』昭和46
(13) 丸山昭二郎・井上哲也編『洋書目録』シリーズ24 昭和45
定期刊行物受入報告
〔部外・会報〕
(1) 長崎山岳会『おんやと』(46—9)
(2) 東京白樺会『白樺』No.223(46—8)
(3) 兵庫山岳会『兵庫山岳』No.52(46—9)
(4) 京都山岳会『京都山岳』No.557(46—9)
(5) 名古屋山岳会『月報』No.26(46—9)
(6) 東京野歩会『山嶺』No.497(46—9)
(7) 日本自然保護協会『自然保護』No.111(46—8)
(8) 日本山岳会『山書研究』No.16(46—9)
(9) 低く山を歩く会『低山』No.75(46—9)
(10) 『岳連通信』46年度4号
(11) 日本登山協会『山と雪』No.161(46—9)
〔雑誌〕

- (1) 『アルプ』No.163(46—9)
(2) 『岳人』別冊(7のスキー) No.292(46—10)
(3) 『山と溪谷』No.397(46—10)
(4) 『創文』No.99, 100(46—8, 9) [その他]
(1) チェットビュロー『行楽』No.33
(2) 明治大学ラカボシ登山隊計画書1
・8
(3) 『Hope Library』No.15
(4) 『中華民国台湾省玉山登山計画書』10月 日本山岳会
(5) 『よさひびき』No.43 Alpen Jodler Kameraden
Journals Arrived in September 1971
1. "La Montagne et alpinisme" No.82; Avril 1971
2. "Die Alpen" No.7; Juli 1971
3. "Der Bergsteiger" 38 Jahrg; August 1971
4. "The Canadian Alpine Journal" V.54; 1971
5. "Deutscher Alpenverein" 23 Jahrg Heft 4; Juli/August 1971
6. "Mazama" V.52 No.13; December 1970
7. "Österreichischer Alpenverein Mitteilungen" 26 Jahrg Heft 5/6; Mai-Juni 1972
8. "Rivista Mensile" Anno. 92 N.6, 7; Giugno, Luglio 1971
9. "Rivista Senderos" No.133, 134, 135, 137, 139, 140, 141, 143, 10. "U.I.A.A." No.45; Aout 1971
図書委員会報告
九月八日(水)午後七時(ルーム)横山、荻野、近藤、山崎、伊倉、野上、大橋、伊藤
一、図書交換即売会の件
本の集まり方によって、担当委員が

- 集まって相談する。
二、"山岳"復刻の件
創刊号だけでなく、続行することにしたい。
三、創刊号は三百部限定。
希望者からは、前金を送っていたいただくことにする。
三、図書委員懇親会の件
十一月六、七日、O・M・Cヒュッテに決定。
ルーム日誌(46年9月)
1日(水) アクスト氏を囲む会
2日(木) 理事評議員会
3日(金) 名簿委員会
6日(月) マナスル隊歓迎会
7日(火) 学生部委員会
8日(水) 図書委員会
10日(金) 婦人懇談会
13日(月) 集委員会
14日(火) 学生部委員会
16日(月) 自然保護委員会
17日(火) 登山部
22日(水) 接門山岳会
23日(木) 常務理事会
27日(月) 学生部
28日(火) 夏山診療所連絡委員会
29日(水) 青年部
学生部
九月中来室者 四二一名
会 員 異 動
名義変更
五二四六 布川光二を黒川村山の会(代表大平勇二)と変更
物 故 者
四七二〇 野田鑊五郎 昭和四六・七・五逝去

- 三三七六 神谷真吾 昭和四六・八・三逝去
一一一六 岩崎京二郎 昭和四六・九・五逝去
山梨支部新役員
山梨支部は、九月十日支部総会を開き、昭和四十六年度行事報告、会計報告、四十六年度行事計画などを行ない、昭和四十六年度支部役員を次のように決めた。▽支部長三井松男▽評議員岩間 升、小田和友蔵、望月雅郎、山本良子、窪川五郎、二塚謙三、田中義元▽監事石塚正明、松尾 寿▽顧問大沢伊三郎、百瀬舜太郎、今井友之助、中山四郎▽常務委員長山村正光▽常務委員田村英也(企画)山岸靖彦(会計)遠藤靖彦(庶務)丹沢一男(装備)▽委員斎藤俊哉、今沢寛、日本 伸、芦沢欣吾、菊島正彦、柳沢 恵、石垣政雄、小野むつ子▽支部選出岳連理事遠藤靖彦
北海道支部新役員
北海道支部は七月二十日支部総会を開き、新役員および新事務所を次のように決めた。
▽支部長伊藤秀五郎 ▽委員安藤久男、新妻徹、安田成男、泉 亮
▽新事務所 札幌市北三条西八丁目北海道大学植物園内
「ロンド」大学へ研究 秋も深まって参りましたが、皆さまにはお元気で過ごしていることと存じます。このたびは一年の予定で家族同伴渡りすることになりました。留守中よろしくお願ひ申し上げます。(河野 長)
山下一夫氏入院 本会監事山下一夫氏は十月下旬より築地聖路加病院に入院、十月二十七日胸部手術を受けたが

- その後の経過は順調である。
渡部節子氏結婚 本会理事渡部節子氏は十月四日札幌で、本会会員渡辺文仁氏と結婚された。お二人の結婚を祝う会を十月九日午後二時から銀座ジャーマン・レストラン・ケテルで開催、にぎやかに新しい門出をお祝ひした。
山日記無料配布 本年度年次晩餐会出席者に限り七二年度版山日記を無料配布します。
入沢文明氏死去 十月二十九日死去
.....
あとがき 十月十六、七日土曜會有志の小出の魚野川川原で鮭を食う会に出かけ、枝折峠から只見湖を見物、只見線で川口で下り玉梨温泉に泊って三条から御神楽岳に登ってきました。紅葉のまつ盛り。霧沢は美しい峡谷でした。十月二十三日の図書交換会も盛会に終わり、ほっとひと息ついていきます。(山崎)
.....
訂 正 会報三三三号「ウェストン師像の由来」の記事中三段目左最後のは田辺氏ではなく、中司文夫氏の誤りでしたので訂正します。
また三三三号「雨に霞む六義園」の記事中二段目十九行「昭和三十六年六月」とあるのは「昭和二十八年六月」三段目終わりの四行「横さん」は「三田さん」の誤りにつき訂正します
昭和四十六年十一月十日発行
東京都千代田区神田錦町三三三 向井ビル
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 山崎 安治
(233) 七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技 報 堂

本山の溪茗

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河

加藤泰著

〈A 5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B 6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

〈A 5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B 5判206頁〉定価2,800円

日高を歩き続け、日高を愛する北大山の会の人々が綴る日高山脈の全て。

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362頁〉定価2,200円

山岳

日本山岳会編

〈A 5判〉

総索引	1,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
61年	1,800円
60年	1,500円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A 5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B 6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A 6判126頁〉1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A 変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

〈A 12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A 5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

〈B 5変型判220頁〉定価3,000円

南極新聞1956〜7年

南極研究会編

〈B 5判横トジ〉定価600円

登山・スキー用具専門店

●買いやすい
山の店

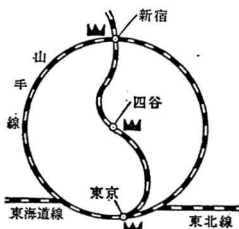
山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



おたるぐンティ
でんや 281-8456
中央区八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440